

十年程前のことだった。感性豊かで人望も厚い、一回り下の同僚がいた。

ある日彼女から、『くまとやまねこ』（*）という絵本を「読んでみて」と渡された。表紙をめくる。題字下には、セピア色の濃淡の輪の中に、仰向けに横たわる小鳥が描かれている。次ページは（ある朝、くまはないていました。なかよしのことりがしんでしまったのです）

毎日、『今日の朝』が続くと信じていたのに、その幸せを失った熊の心情を、セピア色の濃淡がしつとりと描き進める。大切な友達の小鳥を、心を込めて作った箱に入れて持ち歩く熊に、森の友達が言う。「ことりはもうかえってこないんだ。つらいだろうけどわすれなくちゃ」……悪気はなく、励ましのつもりでかけたりかけられたりする言葉だ。私にとっては、辛さが増してしまったことのある言葉だ。暗く閉め切った部屋にとじこまる熊の姿は、背中からそつと包んであげたくなるほど痛々しい。

ある日のこと、久しぶりに外に出た熊は、光・風・匂い・色が生き生きしていることに気づく。そこで出会った山猫。彼は、「きみ



絵本との出会い

はことりとほんとうになかがよかったんだね。ことりがしんでずいぶんさびしいおもいをしているんだらうね」と共感してくれた。山猫は熊と小鳥のためにバイオリンを弾いてくれる。目をつぶり小鳥とのことを思う絵に少しずつ桃色が添えられてくる。山猫が差し出した古いタンバリンを見た熊は、山猫にもずっと一緒だった友達がいただらうと思うけれど、それを聞かないで一緒に旅することにする。

私は、鼻水をすすりながら、心地よい涙を流した。この絵本は、自分の手元にも欲しいと思う、本屋で求めた。娘も小学校高学年になつていたが、やはり泣いた。

人は、寄り添い共感してもらい癒され、そして、前に進もうと思えるのかもしれない。単色基調の絵本なのに豊かな色まで浮かんでくる、いい絵本に出会わせてくれた同僚に感謝した。

*絵本『くまとやまねこ』

湯本香樹実・文

酒井駒子・絵

出版社・河出書房新社

■問い合わせ

人権啓発広報委員会

☎ 880・6569